ガマで生まれたおじいの命

沖縄県立球陽中学校三年　古波藏　咲枝里

私のおじいは、昭和十九年九月生まれの七十九才。いつも周りの人の為に行動する働き者で、せっかちだけどとても優しい自慢のおじいです。

昔は、主に麻薬や薬物を取り締まる警察官でした。情熱溢れる人柄から「コロンボ刑事」と呼ばれていたそうです。

おじいの生まれた頃は、太平洋戦争が勃発し沖縄の地上戦が始まろうとしていた時でした。おじいの父である曽祖父「萬吉（まんきち）」は、防衛隊として南部島尻に召集されてしまい、二才の娘と残された曽祖母「トヨ」は、近くにあるこうじガマの中で、おじいを出産したそうです。

病院や医薬品も無い中での出産は、どれほど不安で大変だったのでしょう。

このこうじガマには、小学校の平和学習で中へ入ることが出来ました。険しい崖を登った所にあり、昔「麹」を作っていた場所ということで、とても冷んやりして涼しかったです。しかし中は真っ暗でとても狭く、多い時で八十人もの人がここで生活していたと聞いて、驚きました。

当時十六才だった近所の九十四才のおじいさんに、話を聞きました。食事はお芋ばかり。火を使うと煙で敵に見つかるので、使う事が出来ず苦労したそうです。もちろんトイレもありません。ガマでは桶の中に用を足していました。

その頃、ガマではもう一人赤ちゃんが生まれ、二人の赤ちゃんをお世話するために地域の皆が水や食べ物を運んで助けてくれました。

その時の生活の厳しさは、とても想像できません。周りの人達の協力無しでは、小さな赤ちゃんは生き残れなかったでしょう。

実際、このガマから死者は出なかったそうです。皆で支えあって守られた命だな、と実感しました。

戦後五十年で発行された恩納村の戦争体験記に、トヨが手記を残しているのですが、トヨは生まれたおじいをおぶって、恩納村から島尻にいる萬吉の所へ歩いて面会に行っています。

舗装されていない険しい山道を、往復八十キロ。

昔の人はちゅーばーだな、生まれた息子を一目でも会わせてあげたい一心で、必死に歩いたのかなと想像しました。この時の面会が萬吉との最後の別れとなってしまします。

萬吉は激しい沖縄戦で戦死してしまいますが、一緒に行動していた近所の方が、目印と一緒に遺体を埋葬して下さりました。お陰で戦後に掘り返し、最愛の夫の遺骨が帰ってきたので、トヨはこの事を、死ぬまで感謝していたそうです。

泣く暇も無くトヨは、幼子二人を抱えて戦後を精一杯生き抜きました。戦争未亡人というのは、悔しい思いを沢山したようです。

生活の為、土方（どかた）作業など男性がやる事は何でもやって働きました。一時期、病気で働けなくなった時は、悔しさ恥ずかしさを飲み込み、子供達の為に生活保護も受けました。病気が治ると、女の意地で生活保護を断り、歯を食いしばって子供達を立派に育て上げました。

おじいに「お父さんが生きていたら良かったな一と思ったことはある？」と聞いたら、「沢山ある。お父さんのいる人達が羨ましかった」と、目に涙を浮かべて言っていました。

おじいは寂しさを乗り越え、警察官として精進し、九年前の叙勲では「瑞宝単光章」という勲章を頂き、天皇陛下にも拝謁しました。

天国のトヨもどんなに喜んでいる事でしょう。

トヨは、手記の最後をこう締め括っています。

「私から主人を奪い、子供達を片親にして惨めな思いをさせた戦争は、二度とあってはなりません」と。

一言では語り尽くせない苦労を味わったトヨの思い、他の方の生々しい戦争体験談を読み、沢山の悲惨な事実を知りました。

今平和な時代に私が幸せに暮らせるのも、必死におじいの命を守って生きたトヨや、温かい手を差しのべてくれた地域の人達のお陰だと、改めて胸に刻むことが出来ました。

私も繋いでくれた命を大切に、これからの自分の未来に向かって、色々な事に挑戦していきたいです。